

講義ノート (10)

～つれづれなるままに～

早いもので、もう最終回になりますので、今回は特にトピックは定めずに、思っていることを話させていただきたいと思います。

\*\*\*\*\*

<「偶然」について>

まずこの授業の第 1 回目でお話ししたキーワードのうち「偶然」ということが私の長いフィールド体験のほとんどの部分を占めていたことがこの授業を通じておわかりいただけたと思います。これはフィールド体験に限らないことで、おそらく人生のほとんどの部分が想定・予測できない偶然から出来上がっていると思います。しかし偶然というのはかならずしもただ漫然と天から降ってくるわけではなく、こと人と人の関係に限ってみると、相手と話してみなければ、そして話すためには何か持ち出してくることのできる知識や記憶がなければ偶然は成立しません。前回「広域世界」では対話と付き合いが肝心だということをお話ししましたが、いくら偶然のチャンスが山ほどあっても、もし対話がなければ満員の通勤電車の中で隣に座った人とおなじで、偶然もへったくれもないわけです。そして「話す」といってもただ挨拶や天気の話だけではすぐに行き詰まってしまうけれども、何かお互いに話題にできるようなことがあれば情報交換の段階に入ることができ、そこではじめて「偶然の出会い」が成立します。

2010 年の 2 月に、シナイ半島以来の付き合いである西尾哲夫さん、水野信男先生、小田淳一さんと一緒に 4 人で南太平洋の楽園ニューカレドニア(フランスの海外県)へ行ったことがあります。なんでまたそんなところに、と思われるかもしれませんが、ニューカレドニア在住のシオラさんという研究者がたまたま西尾さんの勤務する大阪の国立民族学博物館へ招聘されて来ていたことがあったのだそうで、小田さんともその頃からフランスのある研究者を通じての知り合いだったのだと思いますが、そのシオラさんが「ニューカレドニアにアラブ人の村があって、知り合いがいる」と言ったのだそうです。そこで「なんでよりによってそんなところにアラブ人村があるの?」ということになり、みんなで興味津々で出かけていったのです。その旅の顛末は小田さんが書いたウェブ上の軽妙なフォトエッセイをお読みください《小田淳一 2011 「天国に一番近い島に流された「アラブ人」たち」

[http://meis2.aacore.jp/photo\\_essays\\_201107.html](http://meis2.aacore.jp/photo_essays_201107.html)》。ここまででも十分に「偶然」ですが、村でも偶然の出会いがいくつかありました。小田さんのエッセイの中に掲載されている写真に写っている二人の人物についてちょっとご紹介しましょう。

一人はアラブ人村（ネサデュー村といいます）のおそらく最年長と思われるアフマド・ベン・アムーリーという当時86歳とっていた老人です。小田さんのエッセイにもあるとおり、おそらく村でアラビア語を解する唯一の人だと思います。他の人たちは皆フランス語ですから。そのアムーリーさんと私がアラビア語で話し始めると、彼の言葉遣いの中に「ムウ」ということばと「ブニーン」という言葉がよく出てくるのです。このふたつはアラビア語のチュニジア方言であって、「ムウ」は英語ならば not に相当、「ブニーン」は同じく good に相当する表現です。そこで「チュニジア出身でしょう」というと、彼のお父さんがアルジェリアの東部つまりチュニジアの近くだったとあって、「なんで知ってるんだ」といいながらニコニコして、他にもいろいろ話してくれたのです。これで単なる初対面の行きずりから「偶然の出会い」へと踏み出したのだと思っています。



アフマド・ベン・アムーリー翁（左）とアフマド・フィラーリー氏（右）

（小田淳一氏執筆のウェブ・ページ「天国に一番近い島に流された「アラブ人」たち」より）

そしてここで大事なのは、私がチュニジア方言を覚えた（といっても基本的な表現だけですが）のは、その5年前の2005年1月にチュニジアへ行ったことがあったからです。その経験がなかったら言葉を覚えることもなく、アムーリーさんとの話は進まなかったことでしょう。そのチュニジアへの旅は、首都チュニスで有名な音楽家サーレフ・ル・マフディー先生に会うこととならんで、南部のネフタというオアシスにあるアブー・アリーという聖者

のザーウィヤを訪ねることが目的でした。このザーウィヤの教団長さんの話す言葉がコテコテのチュニジア方言だったため、私もチュニジア方言に慣れるしかなかったという次第です。

ちょっと脱線しますが、このザーウィヤはかつて独立心の強い「イバーディー派」の拠点だったところで、聖者アブー・アリーは13世紀の人物ですが、その後継者たちが北アフリカの各地に支部を作った、知る人ぞ知る有名な人物なのです。そして私がこの人物の名前を知ったのは、じつは第8回の授業で説明したモロッコのザーウィヤ・スイディ・ハムザを調査していたときだったのです。ハムザ村の象徴である聖者ブ・サーレム・ル・アイヤーシュがメッカ巡礼に行ったとき、チュニジア南部のこのアブー・アリーのザーウィヤに逗留し、その後ハムザ村からメッカに行った人たちもここに世話になったというのです。しかし私はモロッコからの巡礼者は海上か地中海沿いのルートを使ったものとはばかり思っていたので、なぜこんな内陸の不便な場所に立ち寄ったのだろうと訝しく思っていました。ですから一度はここを訪れてみたかったのです。ところがこのネフタ訪問で教団長から聞かせてもらった話によって、アトラス山脈より内側の内陸ルートもあったんだということを初めて知ったのです。そしてチュニジアのカイラワーンからアルジェリアのガルダイヤ（赤坂小町の旅で通ったことがあります）までの内陸ルートはこのアブー・アリーの教団網が押さえていたというのです。

これを聞いたときハッとしたのが、東からの大移動の末に西サハラからモーリタニアにまで至ったマアークル系の諸部族や後のルギーバート族などのアラブの大遊牧部族のことです。彼らを通ったのがもしかしてこのルートだったとすると、西サハラやモーリタニアにイバーディー派（あるいはその前身であるハワーリジュ派）にルーツを持つザーウィヤが点在するのも頷けるのです。さらにいうと、1997年にオマーンへ行ったことがあるのですが、オマーンの内陸の旧都ニズワは8世紀からすでにイスラーム世界におけるイバーディー派の中心拠点だったところで、法学派としてはマーリク派と結びついてきたということをそのとき知りました。そうすると北アフリカから西アフリカにかけてのほとんどの地域がマーリク派法学になっているのも、もしかしたらこの内陸ルートによって運ばれたイバーディーの伝統によるものかもしれないと身をもって実感できたのです。そしてこの内陸ルートは今でこそすたれているけれども、きっと長い歴史時代を通じて北アフリカの表街道だったのではないかと思いついたのです。



チュニジア（2005年）  
ネフタ村のアブー・アリー廟  
（教団長と私）



オマーン（1997年）  
古都ニズワの町並み

こうしたことはもしかしたらすでに歴史資料に記されていて、歴史学者はもう知っていることなのかもしれませんが、あえて私がこんなゴチャゴチャした事柄を紹介したのは、異なる時期に異なる場所で異なる目的でおこなった、言ってみればバラバラのフィールドワークの経験が、思いもよらぬ偶然の結びつきによって「理解」を生み出すという実例をお見せしたかったからです。ちなみにオマーンへ行ったのは「水利システムの調査」、モーリタニアに行ったのは「古文書の保存状態調査」、西サハラ近辺は「部族調査」だったので、今述べたようなこととは直接の関係はありませんでした。つまりフィールドワークの残余経験の中からいろいろな事項の断片が引っ張り出されてきて、チュニジア南部のオアシス村での突然の「理解」を形作ったということです。

さて話をニューカレドニアに戻しましょう。ともかくチュニジアで必要に駆られて覚えた少しばかりのチュニジア方言のおかげで、私は村のアムーリー翁と対話するきっかけを得たのです。そんなつもりで（つまり数年後にアムーリーさんと話す準備として）チュニジアへ行ったわけではなかったのですから、これはまさに偶然の産物だったわけです。同じような例として、先ほどの小田さんのエッセイの写真にアムーリー翁と並んで写っているもう一人の人物にも触れておきましょう。

彼はアフマド・フィラーリーという名前のモロッコ人で、この村の住人ではありません。2週間ほど前から、この村の有力者であるブ・フネーシュ氏の家に居候しているとのことでした。彼とはあまり話す時間がなくて残念だったのですが、わずかばかりの会話でも結構話が弾んだのです。まず大きかったのは、お互いがモロッコ方言アラビア語で話げできたこと

にあります。私はともかく、彼のほうはこんな地球を半周もするような太平洋のど真ん中の島で、それも日本人を相手にモロッコ方言で話すなどということは想像もしていなかったに違いないのですが、面白かったのは彼はそのこと自体には大して驚きもせずに平然としていたことです。私にとってはこういう反応はほかでもよくあることだったので、私も驚きませんでした。ただ、彼の名前を聞いて私が「タフィラルトの生まれ？」と尋ねたら、途端に相好を崩したのです。この質問には驚いたようでした。俄然話が盛り上がったのです。

ちょっと説明しましょう。フィラーリーという姓はモロッコでは有名な姓です。元々はモロッコ東部のサハラの入りにあたるタフィラルト地方の有力部族の名前なのです。そしてザーウィヤ・スイディ・ハムザのところで少し触れましたが、現モロッコ王朝であるアラウィー朝が17世紀にそのタフィラルト地方から興ったとき、地元のフィラーリー部族がいち早くバイアを結び、以来今日に至るまで王室を支える最重要の勢力となってきたのです。ちょっと前までモロッコの外務大臣を務めていたのもフィラーリーという人でした。しかし外国人でそんな事情を知っている人はふつうほとんどいません。というわけで、「あんたはなんでそんなことまで知っているんだ」ということになり、「じつは・・・」という具合に盛り上がったのです。なお、彼アフマド・フィラーリーはモロッコの古都フェズのアーリム（イスラーム知識人）の息子なんだそうです。フィラーリー部族の有力者たちはアラウィー朝が天下を取ってフェズを拠点として以来、一緒にフェズに移っていますから、彼の話も不思議ではありません。もしもっと時間があれば、なぜ彼がこんな村に来ていて、何をしようとしているのか、いろいろなことを聞けたと思うのですが、それも「対話」のひとつの側面でしょう。対話は完結しないものなのですから。そしてもしかしたらまた地球上の別のどこかで思わぬ形で彼と再会するかもしれませんが（偶然とはそういうものです）、そうなったとしてもきっと彼は昨日会った友達のように驚きもせずに平然と私との対話の続きをするだろうと思います。

なおこの日、つまり我々が村を訪れた日、彼は村の人たちに交じって現れて、みんな一緒にモスクへ行って、彼がイマーム（先導者）役となって昼の礼拝をおこないました。彼がアーリムかどうか知りませんが（家系からいって十分にその可能性はあります）、そしていつまで村にいるつもりだったのかも知りませんが、彼自身は自分を「フキー（先生、法学者）」と言っていました。どうやら首都ヌメアのイスラーム協会を通じてどこかから派遣されてきたようです。それはともかく、彼のようにヨソ者がアラビア語とイスラームの知識を買われて一時的にせよその土地に客人として滞在し、そのまま居着いて村人とバイアを結ぶ・・・なんて想像したら愉快ですね。西サハラのマー・ル・アイニーンみたい。これぞイスラーム世界の面目躍如！

ニューカレドニアでは、別の機会にもう一人、別のモロッコ人とこれまた偶然に遭遇しました。首都ヌメアのモスク（なんと「モスク」と呼んではいけないというフランスの高等弁務官の命令で、「Centre Islamique de Noumea（ヌメア・イスラム・センター）」と

ました!)を訪れたときに、帰り際に、礼拝のために駆け込んできた男がいて、話してみたらモロッコ人だったのです。ムスタファという名で、モロッコの古い町メクネスの出身で、7年前に仕事でヌメアにやってきて、今は奥さんとお嬢さんと3人で暮らしているとのこと。私が「メクネスだったら、イーサーフ教団(=モロッコ屈指の大教団です)に何回か行ったことがあるよ」と言ったらニコニコして、「じゃあ、来年モロッコに帰るから、寄ってくれよ」と言い、「ヌメアにはもう一人モロッコの女性がいて、ベリーダンスの先生をしているからよかったら紹介するよ」とも言ってくれました。あれ?ベリーダンスの先生?じつはアラブ人村でお世話になった有力者のブ・フネーシュさんのお嬢さんがヌメアでモロッコ人の女性からベリーダンスを習っていると言っていたから、その人じゃないか。こんな小さな町だから多分そうだと思うのですが、そして私一人だったらイソイソとその先生に会いに行ったと思うのですが、そこが集団行動の悲しさ、同行の西尾さんや小田さんたちはさっさとこのモスクをあとにして帰路につこうとしていたので、ムスタファとの「対話」はそのまま切り上げて、みんなの後を追ったというわけです。

こうしたエピソードも含めて、ニューカレドニアのアラブ人村をめぐる複雑だけれども興味深い詳細を論文にまとめてありますので、関心のある方は是非お読みください。「民族ってなんだろう」「文化ってなんだろう」ということを批判的に考えるにとどまらず、「偶然」のもたらすものについても書いておきました。多民族が混交する現代の世界を考える一助になれば幸いです《堀内正樹 2012 「開かれた『民族』—ニューカレドニアのアラブ人村」『成蹊大学文学部紀要』第47号。pp.95-115》。

-----  
<2種類の「偶然」>

偶然の出会いということは漫然と天から降ってくるわけではない、ということでお話ししてきたわけですが、そうすると「そもそも偶然とはなんぞや」を考えるべきだという方もいるかもしれませんね。「偶然」ということは対概念の「必然」ということとセットになって、昔からあれこれの分野で議論のネタになってきました。ランダムとか不確実性とか不確定性とか曖昧とか不規則とかカオスとか無秩序とか混沌とか、さまざまな言い換えや類語を伴いながら、数学でも物理学でも情報学でも、あるいは神をめぐる宗教議論でも、哲学でも、さらには文学でも、すでに数多くの「偶然」の議論が果てしなく展開されてきました。今さらそうした議論の泥沼に首を突っ込むつもりはありませんが、そしてその能力も私にはありませんが、それでは無責任になるかもしれませんので、ちょっとだけ弁明しておきたいと思います。

物事は抽象的に議論するよりも具体的に考えたほうが生産的ですので、まずは物理現象として大地震を考えましょう。2011年に東日本大震災というとてつもない巨大地震が起き

ました。あれは偶然だったのでしょうか、それとも必然だったのでしょうか。考え方によってどちらともいえますよね。「太平洋プレートが大陸プレートの下に沈み込み続けている限り、当然起こるべくして起こった現象だ」と考えれば必然でしょうし、ちょっと偶然寄りなのは確率論で、「2011年に起こったのは偶然かもしれないが、千年に一度は起こるんだ」という点では必然ともいえて、「そんなこといったって10年後にまた起こるかもしれないでしょ」あるいは「千年たっても起こらないかもしれないでしょ」となるとあれは偶然になります。このあたりの議論は面倒くさいのですが、物事は必ず原因と結果が結びついてできているという考え方は「決定論」と一括されてきたもので、今はまだ技術と知識が不十分なので完璧ではないが、いずれ世の中のすべての現象は説明できるようになるし、予測することもできるようになる、という立場です。究極の必然論といってもいいでしょう（「ラプラスの悪魔」なんてのはその代表例ですから、興味があったら検索してみてください）。その対極にあるのが偶然論で、一見規則的・因果的に見える現象もたまたまそうただただで、本質的には物事は幾つかの要素のランダムで一時的な組み合わせの暫定的な姿に過ぎなくて、世の中はいつも変化しつつ、何が起こるかわからないし、何が起こっても不思議ではない、ということになります（サイコロを振ったら3回続けて1が出たときに、それは規則的に見えるかもしれないが、偶然だろ、と言うわけです）。確率論というのは必然論と偶然論の中間におかれます。

さてどれが正しいのか。じつはこれらはいずれも正しいとか間違っているとかいう問題ではなくて、言うなればそれぞれの人の信念だというしかないのではないのでしょうか。偶然か必然かというのは現象（この場合は大地震）それ自体に備わった性質（あるいは属性）なのではなくて、それをどう見るかという解釈の問題だといってよいでしょう。そして面白いのは、偶然論の立場をとっても必然論の立ち場をとっても（確率論でもいいですが）、起こった地震そのものは首をひねるような不可思議な現象ではなくて、起こったことは「当然」だという点で一致するのです。なぜなら偶然論の立場からすれば、世の中何が起こっても不思議ではないのですから、大地震があたるとき起こってもそれは当然でしょうし、逆の必然論の立場からしても、原因ははっきりしているのですから、これもまた起こって当然の現象になります。つまり両者ともあの大地震は「想定内」の出来事ということで一致するのです。

そこで私が問題にしたいのは、いずれも生活感覚からかけ離れているだろうということです。あの地震の規模の大きさや被害のすさまじさに我々が度肝を抜かれてうろたえたのはもちろんですが、やはりあれは尋常ならざるあり得ないような特別の事態だったのではないのでしょうか。しかもよりによってなぜあの日あの時間にあの場所で起こったのか。とても「想定内」どころではなかったと思います。あの日家を出るとき「今日は大地震が来る可能性があるから、あれをやっておこう、これをやっておこう」などと想定していた人などほとんどいなかったと思いますよ。だからあの地震は想定外の偶然と呼ぶにふさわしいのではないのでしょうか。

では地震という物理現象ではなく、人と人の関係についてはどうでしょう。冒頭で満員の

通勤電車の例を出したので、ここでもその例を考えてみましょう。その電車で自分の隣に座る人は誰か。おそらく見ず知らずの赤の他人でしょう。その人と隣り合わせになったのは、必然論（決定論）からいえば、その人の自宅の場所や通勤経路、ホームの前のほうに乗るか後ろのほうに乗るかの癖、その日に家を出た時刻、その人の歩くときの歩幅や速度、他の乗客の数等々、あらゆる情報がつかめれば「必然」だったということが説明できますし、事前にそうした十分な情報があれば予測だってできます。では偶然論ではどうでしょうか。これは単純に「偶然」です。そして必然論でも偶然論でも、私のとなりに赤の他人が座るのは「想定内」ですよね。では生活感覚からすればどうでしょう。赤の他人が隣に座るのはごくふつうの想定内でしょうが、よく知っている友人が隣り合わせになったら、それこそ「偶然」ですよね。想定外です。

そうすると私たちは、議論上の「偶然 v.s. 必然」の対立軸の中で使われる「偶然」と、生活感覚上で使われる「偶然 v.s. 当然」の「偶然」とを分けて考える必要があるのではないのでしょうか。つまり理屈のうえでは偶然も必然も「想定内」に含まれてしまって一緒になり、それに対立すべき「想定外」はどこにもありません。世の中に生じることはすべて想定内だからです。これに対して生活感覚では「想定内」に対立する「想定外」を偶然と呼んでよいのではないのでしょうか。赤の他人が隣に座るのは想定内なので驚きもしませんが、友達が座るのは想定外ですから「いやー、こんな偶然もあるんだねえ！」となります。

私がこの授業でずっと使ってきた「偶然」という言葉は、この生活感覚上の偶然、つまり「想定外」という意味での偶然でした。

---

#### < 想定内を尊ぶマニュアル社会 >

そこで次に考えたいのが、電車で隣の席に座る赤の他人です。何も起こらず、何も話さず、乗換駅で互いに降りていったら、「想定内」のあたりまえで、偶然もへったくれもなかったですよね。ところがその人と少し話してみることにしてしまおう。すると同じ長野県の生まれだったとか、同じ早稲田の卒業生だったとか、取引先の会社に勤めている人だったとか、同じ浦和レッズのファンだったとか、何かつながりを発見して「いやあ、偶然ですね」となります（もちろんそうならないことだって多いでしょうが）。こうなると想定内だった赤の他人がにわかに個性を帯びて、想定外の偶然の出会いへと変わります。今日の冒頭で「偶然というのは必ずしもただ漫然と天から降ってくるわけではない」といったのはこのことなんです。大地震や友達が隣に座るといったことははじめから想定外ですから天から降ってくる偶然といってよいでしょうが、「想定内」から「想定外」へ変わるのは発見する偶然といってよいでしょうね。私がこの授業で紹介してきた事例のほとんどはこの「発見する偶然」でした。漫然とやり過ごしていたら存在しなかった偶然です。

前回、広域世界では多種多様な人々が行き交うから対話が必要になる、というところから



説明を始めました。東京の通勤電車だってじつは同じ状態にあります。いろいろな背景や事情を背負った人たちがぎゅうぎゅう詰めになっているはずですが、しかし対話をしませんから「偶然」は生まれず、何も変わらないし、何も得るものはありません。ラッシュ時には一両に 200 人も 300 人も乗っているのに、車内はじつに静かですよ。対話をすればいろいろな偶然を発見することができ、得られる情報も増え、新たな人間関係の幅も広がるはずですが、そしてさまざまな情報の組み合わせの選択肢も増えるし、新たな状況への適応力も増すはずですが。

ではどうして対話をしないのか。単に「知らない人とは喋っちゃいけません」という悲しい教育をされてきたというだけではないでしょう。おそらく「想定」を崩すことを忌避することが制度化されているからではないでしょうか。その代表例がマニュアルです。電化製品から防災に至るまで、じつに多くの詳細なマニュアルが作られています（大学入試センター試験の監督者マニュアルなんてすごいですよ。本一冊分くらいあって、あれを全部読んで理解している教員なんておそらく日本中探しても一人もいないんじゃないでしょうか。作っておきさえすればよいという行政的発想でしょうね）。こういう場合にはああしろ、ああいう場合にはこうしろ……。あらゆる場合を想定して、その対応方法が書かれています。それはそれでいいのですが、マニュアルは想定外の事象に対しては無力ですから、想定外を想定内へ取り込むことは歓迎するでしょうが、その逆つまり想定内をわざわざ想定外へ持ち出すことを好むはずがありません（ちなみに「科学」は想定外を想定内へ取り込もうとする営みですから、マニュアル思考とはウマが合います。またなにか不測のトラブルが生ずるたびに「再発防止策」を作ってマニュアルに追加するというのも同列。きっと将来再発防止策でマニュアルはパンパンに膨れ上がって破裂するのではないかしら）。電車の場合、それはお喋りサロンではなく、人を運ぶ道具と想定されているわけですから、余計なことや他の人の邪魔をするな（関係を持つな）ということになるのでしょうね。

想定内を尊ぶ発想（つまり偶然を排除する発想）は、「計画」「予定」「約束」を大事にするという姿勢をサポートします。きちんとした計画を立てろ、一度決めた計画は途中で放棄するな、計画は実現しなきゃ意味がない、予定表通りにやってくれなくちゃ困る、約束はなにがなんでも守れ……。じつに息苦しいですよ。偶然の出来事によって計画通りのことができないと（たとえば人身事故で電車が遅れて遅刻した）、「言い訳をするな」「そういうことも見越して早めに家を出ろ」なんて言われた日には、あきれてものが言えなくなるどころか、悲しくなってしまうですよ。これに効率性が追い打ちをかけます。無駄なことはするな、早くしろ、時間を節約しろ……。この先にいったい何があるのでしょうか。想定が崩れたら大混乱ですよ。なんでもできる効率的な機械の代表になっているスマホが、地震や豪雨など想定外の災害で充電できなくなったらただのガラクタ、それだけでもうお手上げです。

さて社会批判をすることが今の目的ではありませんので、想定外という意味の「偶然」に

話を戻しましょう。多種多様な人々が行き交うという同じ状況から出発しても、偶然の発見に消極的な社会と、広域世界のようにそれに積極的な社会とでは、もたらされる結果に大きな違いが生じてくるような気がします。慣れの問題です。対話を通じて偶然を発見することが多ければ多いほど、偶然に対する免疫というか、受容力のようなものが増えると思うのです。「天から降ってくる偶然」も含めて偶然に遭遇してもそれほど驚かないということですね。日頃から想定内を想定外へ持ち出すことに積極的なのですから、驚かなくても不思議ではありません。私が10年ぶりにフラッと訪ねていっても驚かないし、ある知人が急逝したと言っても(悲しそうな顔はするけれども)それほど驚きはしない。偶然はすでに織り込み済みと言ってもいいでしょう。という「なんだ、それじゃ結局偶然は想定内という偶然論と一緒にないか」と思われるかもしれませんが、想定外はやはりあるのです。「想定外のこと起こる」というのと「なにが起こっても想定内」というのでは大違いです。

少し脱線しますが、そして私は個人的にはあまり好きではないのですが、イスラームではこうなんだという次のような神学的な説明がよくあります。世の中に起こることはすべて神の手帳に書かれている、神はすべてを知っている(つまり完全な決定論・必然論)。一方人間にはそれはわからない、不可知(つまり完全な偶然論)。必然論と偶然論はまったく矛盾しないということになります。さらに、神様は人間が理性を働かせて物事を理解することを勧めている、とも。こういう議論はその筋の人たちに任せようと思います。日常生活においては、やはりなにかは想定し、計画し、見通しを持ち、一方その通りにはならないことも知っている、ということではないかと私は思います。

マニュアル優先社会と広域世界では、想定内と想定外のどちらに軸足を置くかという点でベクトルが逆になっている、と考えてもよいかと思えます。とくに想定内の事象の扱いが逆になるんですね。広域世界では、想定内に対する信頼性がマニュアル社会のように強固ではなく、いつも不安を持って想定内に接します。1970年代から80年代の半ば頃まで(それ以前のことは知りませんが)、中東で飛行機に乗ると、飛行機が着陸態勢に入って、車輪が着地してゴーンと音が鳴ると、乗客は一斉に叫びながら拍手しました。「やったー」という感じでした。今に比べて墜落事故が多かったのと、当時の中東の飛行機は中古の使い回しが多かったということもあったのでしようが(笑)、無事着陸できてよかったという思いが強かったのだらうと思えます。もちろん、本当に危ないと思ったらだれもはじめから乗らないでしょうから、乗ったということはおそらく無事に着くだらうとは思っていたはずですが(つまり墜落はしないだらうという想定はあるのですが)、その想定に全幅の信頼を置くことはないのではいでしょうね。今はさすがに拍手は起こりませんが、それでも小声で「アル・ハムドゥ・リッター(神様のおかげです)」とつぶやいている人は見かけます。

じつは物事が始まる時に「ビスミッター」(直訳では「神の御名において」、意識では「神様、お守りください」と言い、事後にうまくいったときには「アル・ハムドゥ・リッター」、うまくいかなかったときには「マー・シャーア・ッター(これも神様がお望みになったことです)」と言うのが慣用句のようになっています。飛行機だけではなくバスやタクシーに

乗るときも、他人の家の敷居をまたぐときも、食事を始めるときも、いつも「ビスミッター」。無事に終わったら「アル・ハムドゥ・リッター」。慣用句、習慣と言ってしまうとそれまでですが、やはりなんらかの心構えというか意識は伴っていると思います。そうやって、マニュアル社会ではうまくいってあたりまえのことなのに、それらに不安を持って接していると言っているでしょう。ですから逆に、イレギュラーなことや想定外のことに對してはわりと平然と接する。電車が10分くらい遅れたって、責任を追及したり謝罪を求めたりなんてことは考えられません。ベクトルが反対を向いていると言ったのはこうしたことです。

ここまで偶然についてわりとポジティブに、楽観的に説明してきたような気がしますが、じつはネガティブな側面だって当然あります。想定外の事柄には好ましからぬことがたくさんあるからです。「天から降ってくる偶然」には飢饉や水害、地震、疫病などの災害もあれば戦争や殺人、恐慌や不景気などの人災もあり、これらの偶然は広域社会かマニュアル社会かの別なく襲ってくるわけですが、「発見する偶然」の中にも対話のもとで喧嘩や詐欺やトラブルなどが生じます。だからはじめから対話なんてしなければ良かったのに、という意見も成り立ちます。君子危うきに近寄らず。たしかにそれはそうなんです、対話を避ければリスクが減る代わりに可能性も減ります。「想定内」が十分に信用できるのであればそれでもいいですが、信用できなければリスク覚悟で対話に励むしかありませんよね。多種多様な人々が入り交じる広域世界では否応なく想定内が脆弱になりますから、その状況に對する術を発達させてきたのかなあとと思います。広域世界のほうが良くも悪くも多様性に富み、柔軟性を持った耐性のある世界であるのはたしかですね。

ここからは粗雑でステレオタイプ的な印象論で恐縮ですが、ヨーロッパから中東へ行ったとき、あるいは中東からヨーロッパへ行ったときよく感じるのは、ヨーロッパはどこも美しくて清潔で便利で静かなのに、中東は小汚くて雑然としていてうるさくて事がスムーズに運ばない。だからヨーロッパはカネはあれどエネルギーを感じられない老人のような国々、中東やアジアは貧乏だけれどエネルギーが豊富な若者的な国々、という感じを持つてしまうのです。リスクを避けて想定内にこもるのは老人の特性でしょうし、逆にリスク承知で可能性を目指すのは若者ですよね。こんなところにもマニュアル社会と広域世界の「想定外」に對するスタンスの違いが反映されているのかなあとと思います。今の日本は当然ヨーロッパ型。息苦しいはずですよ(>\_<)

\*\*\*\*\*

### <旅について>

旅といってもいろいろな旅があって、ひとくくりにするわけにはゆきませんが、偶然に遭遇する機会が多いということはいえるかもしれませんね。第1回の講義ノートに書いたような学術調査、探検隊、留学、冒険、旅行、商売、修行、協力活動、ボランティア、布教、

政治ミッション、軍事ミッション、結婚生活などといったものもぜんぶ旅とってよいでしょう。ステイホームで家に閉じこもっていることに比べたら、どれも偶然に遭遇する可能性は格段に多いことはたしかです。それも「対話」を伴う旅であればなおさらその可能性は高いと思います。ホテルやレストランの人としか話さず、外に出るときは添乗員にすべて任せて観光スポットを巡ってくるだけのパリ・ロンドン 10 日間の旅だって、それなりに偶然には遭遇するでしょうから、一概にバカにはできません。

では旅、特に対話を伴う旅ならば、良いことばかりかということ、そうではありません。すでに述べたように偶然にはいやな結果をもたらす偶然だってかなり多いからです。この講義では結果オーライの良い偶然ばかり並べてきたような気がしますが、じつはいやなこと、つらいこと、腹立たしいこと、おぞましいこと、恥ずかしいこと、失敗、反省しなければならぬこと、こういうことが満載です。書かなかっただけです。

また旅には毎日新しい刺激的なことが詰まっているかということ、これも違って、無為に過ごす時間（じつは無為かどうかは後になってみないとわからないのですが）もひじょうに多くありますし、熱があるとか下痢をしているとかだるいとか歯が痛いとか気分が悪いとか疲れがたまっているとか、要するに気が乗らないときだってしょっちゅうです。また人と話すだけが対話ではなくて、そのためには文献を読むことや言葉をじっくり覚えることも必要になります。休息や遊びも必要です。人と会いたくないときだって当然あります。こういうものも全部含めて私は「残余経験」と呼んだのですが、そうするともっぱら残余経験から成る旅は日常にどんどん近づきます。旅は特別なことではなくなって、むしろ旅と日常の境界線はなくなってゆくといつてよいかもしれません。旅の日常化。

中東では人々が対話を求めて頻繁かつ気軽に移動するということを申し上げましたが、これはおそらく旅が日常化している姿だといつてよいかもしれません。そこに旅と日常の区別がない。そして旅であっても、ある場所に何日も、あるいは何ヶ月も、あるいは何年も逗留することだってあります。そして中東だからといって、みんながしょっちゅう居場所を変えているわけではなく、生まれた土地で一生を終えてゆく人だって珍しくはない。それでもそこは旅が日常化した土地なんですね。移動を特別扱いしないという意味において。

\*\*\*\*\*

<だれが「彼ら」で、だれが「我々」か>

もう一つ、境界線がなくなってゆくということについてですが、この授業を通して私がお話ししたことは「広域世界（中東・イスラーム世界でもいいですが）についての説明」だったのか、それとも「私堀内正樹自身の経験や解釈」についての話なのか、どっちなんだとお思いになった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。じつはここにも境界線がないので

す。調査する側とされる側、我々と彼ら、自己と他者、主体と客体・・・こうした区別を要求するのはマニュアル社会の考え方であり、整然とした時空間秩序の厳守を前提とした発想です。こちらは日本であちらは中東。我々は日本人で彼らはアラブ人。こうした境界をいつも崩さずに持っている、堀内が中東について書いた文章は「我々が彼らについて書いた文章」から逃れられません。しかし堀内正樹がヒジャーズではウベイダッラーと、シナイ半島ではシャーキルと、モロッコではラディーと一緒にになにかをやって、なにかを考えて、なにかを発見したことを書いたとなると、「我々」というのはヒジャーズではウベイダッラーと堀内、シナイ半島ではシャーキルと堀内、モロッコではラディーと堀内、ということになりませんか。私が我々について書いた、というのが正解でしょう。そのとき会ったことも見たこともない熊本県の鈴木何某さんや岩手県の山田何某さんは「我々」には入ってきませんよね。「我々」というのが自動的に「日本人」とはならないのです。

「彼ら」というのはさらに厄介です。「日本ではこうだけど、外国ではどうなの」という問いと同じで、外国と云って地球には百何十カ国もあって、そのどこかわからなかったら何もいえませんよね。「彼らアラブ人は」というときも同様に、アラブ人というのが具体的にどこのだれかがわからなければ何も言えないのです。それほど世間はバラエティーに富んでいるんです。

事実は小説よりも奇なりで、今日ご紹介したニューカレドニアのアラブ人村のブ・フネーシュ氏は、奥さんのおじいさんがハラダさんという日本人だそうですし、同じ村のポール・アブデルカーデルさんの場合、自分のおばあさんはイタリア人で、奥さんはベトナム人だそうです。そしてブ・フネーシュさんもアブデルカーデルさんもお二人とも母語はフランス語で、国籍はフランスです（ニューカレドニアはフランスの海外県ですから）。「彼ら」はいついだれなんでしょう？ フランス人なんだろうかね、自分たちはアラブ人だということですけど。

ところで、2014年の8月にインド洋の南西の隅に浮かぶレユニオンという島に行きました。マダガスカルのお隣の島です。ここもフランスの海外県です。この小さな島の山奥のシラオスという町にアルジェリア系の女性が住んでいるという話を聞いて、その人に話を聞きたくてはるばる会いに行ったのです。この島へ行って驚いたのは、ニューカレドニアと同じか、あるいはそれ以上に「わけのわからない(笑)」島だったんです。そこでは、すぐ近傍のアフリカ系の人たちはもちろん、インド系、中国系、東南アジア系、アラブ系、フランス系といったそれこそ多種多様な人たちが行き交い、混血も進んでいます。県庁のあるサンドウニの町が目抜き通りには立派なモスクがあるかと思えば、キリスト教会ももちろんあちこちにあるし、下町にはヒンドゥー寺院もあります。

この島はたびたび登場した小田淳一さんが長年にわたってフィールドワークを続けているところで、私は彼の仕事を邪魔するような形で訪れ、小田さんの友人である地元のアニークさんという女性を介して、その女友達であるアルジェリア女性を訪問したわけです。アニークさん自身は、お父さんがインド人と地元レユニオン人の混血で、お母さんはアフリカ人とアラブ人（アラブ人

というのはイスラム教徒という意味で使われるので、どこの人なのかはよくわからないのですが)の混血なのだそうです。この島では彼女のような複雑な出自は決して例外的なものではなく、ほとんどの人が混血だということです。こういう入り交じった状態を「クレオール」と呼ぶのですが、血筋も食べ物も宗教もクレオールなんですね。

ちなみに目的だったアルジェリア女性はファーイザさんという名前で、本人はフランス本国のリヨンで生まれ育ち、結婚相手のフランス人男性がこの島のシラオスに仕事で赴任したので一緒に来たのだそうです。親戚はリヨンにいるけれども、両親がアルジェリアのカビール地方出身なのでアルジェリアにも親戚は多いということです。カビール地方はベルベル語なので彼女もベルベル語を話すのか聞いたら、ベルベル語はほとんどダメで、アルジェリア方言のアラビア語を話してくれました。今はシラオスの市役所で働いているのだそうです。



レユニオン島・シラオスの市役所 (2014年)

さてこう見てくると、「彼ら」にしても「我々」にしても、そのたびごとに Aさんと Bさんと Cさんが「彼ら」、私と Dさんと Eさんが「我々」というふうに具体的な個人名を挙げながらグループ分けするしかないということがおわかりいただけると思います。そしてそもそもそういうグループ分けに何の意味があるのか、私には甚だ疑問です。むしろそうしたグループ分け(=境界化)が、世間の実相を理解しようとするときの障害になるのではないかと考えています。

旅に苦しさを補うような醍醐味がもしあるとするなら、こうしたさまざまながんじがらめの人為的境界線を超え出て行く解放感かなあ。そして、そうしょっちゅうあるわけではないですが、尊敬すべき人物、信頼できる人物(と自分が勝手に思い込んでいるだけかもしれませんが)と遭遇するチャンスに恵まれること。これはもう直感とか感受性といった、およそ学問的な考察対象とは無縁なものでありながら、他のなににも勝る大事な感覚と一緒に

なっています。「三つ子の魂百まで」といいますが、10代後半から始まった私の旅が50年たってもまだ終わらないのは、こうしたことがやみつきになっているせいかもしれません。

\*\*\*\*\*

これからに向かって  
『<断>と<続>の中東～非境界的世界を遊ぶ』

この授業ではいろいろなこととお話ししてきましたが、思うに所詮は私の独り言に過ぎません。じつはこうした独り言の数々を仲間たちに問いかけたことがあります。まさしく中東・イスラーム世界の各地でフィールドワークを重ねてきた人たちです。若手もいれば中高年もいます。百家争鳴、あれこれ議論を重ねました。そして5年前にみんなで一冊の本を作り上げました。私を含む総勢13名の共著です。それが次の本です。

『<断>と<続>の中東～非境界的世界を遊ぶ』(堀内正樹・西尾哲夫編)悠書館、2015年。

この本には、13人がそれぞれの場所でそれぞれの経験から考えたことが本気で書かれています。そしてよくあるような単なるバラバラの原稿を寄せ集めただけの本ではなく、この授業でお話ししたことがふんだんに盛り込まれています。ですから私堀内が言ったことを、同じ中東をフィールドとする他の人たちがどう思っているのかがわかるようになっています。編者を務めた私が自分で言うのもなんですが、中東に関する本としても、また人類学に関する本としても画期的な意義を持っていると自負しています。そして人文・社会研究というもののこれからのあり方を示していると思っているのです。ふだん謙虚な私がそこまで言うのですから、本気度の高さを推察してください(笑)。興味を感じた方は、夏休みにでも図書館から借りて是非目を通してください(買ってくださいななどといわないところがやはり私は謙虚ですね!)

最後になりますが、上記の本にも参加した3名の気鋭の人類学者が、その後続々と単著を出版しました。私が提起してきたいろいろな問題もそれぞれに考慮していただいたうえで、さらに持論を発展させているということを実感しています。いずれも熱のこもった力作で、好著ですので、お薦めします。

\* 大坪玲子 『嗜好品カートとイエメン社会』、法政大学出版局、2017年。

\* 池田昭光 『流れをよそおう—レバノンにおける相互行為の人類学』、春風社、2018年。

\* 齋藤剛 『<移動社会>のなかのイスラーム：モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』、昭和堂、2018年。

また中東とはほとんど無縁な中国の漢民族の農村でフィールドワークをおこなった新進気鋭の若手研究者が、上記の我々の本の価値を認めて、独自にそれを発展させた次の本もお薦めします。予期しなかった分野での発展可能性を示してくれている心強い一冊です。

\* 川瀬由高 『共同体なき社会の韻律—中国南京市郊外農村における「非境界的集合」の民族誌』、弘文堂、2019年。

-----

ではこれで終わりにしましょう。またいつかどこかで、今度はオンラインではなく、皆さんと直接会って言葉を交わし、偶然の出会いを発見できることを願っています。

完